● 読書感想文コンクール　中学生の部 ●

入選

秋山　友美（あきやま　ともみ）松木中 2 年生

作品名：永遠の平和に向けて

図書：平和のバトン

「原爆の恐ろしさを忘れてはならない。」
私が平和のバトンという本を読んで一番大切だと思ったことです。この本は、広島で原爆を体験した人の記憶を、高校生が絵に描いて記録として残す『次世代と描く原爆の絵』プロジェクトのお話です。私は八月六日にテレビで広島の平和記念式典の様子が放送されているのを見て、具体的にどのような被害があったのか、なぜ毎年式典を行い、平和の大切さを訴えているのかに疑問をもったので、被爆者の実際に体験したことが絵と共に書かれているこの本を手にとりました。

私はこれまで広島の原爆投下について、歴史の授業で学習した以外に触れることがありませんでした。原爆とは重度の火傷を負い、死に至る場合もあるということは知っていましたが、実際には数えきれないほどの人数が亡くなり、放射能による後遺症が残ってしまった人がいるという現状があったので、とても衝撃を受けました。そのような悲惨なことがあったということが分かり、悲しい気持ちになりました。

この本では四人の原爆体験者が自分の身に起こったことを現実的に語っています。その中でも私が一番印象に残ったお話は、兒玉光雄さんが語っていたお話です。

兒玉さんは当時中学一年生で、教室にいる時に被爆しました。兒玉さんは、爆発時に放射線に含まれるガンマ線と中性子が、一〇〇万分の一秒のスピードで、自分のからだを切ってしまったと話していました。原爆、つまり核兵器は鉄砲などに比べて一度に多くの犠牲者を出し、落下するスピードも速いということが分かり、言葉では言い表せない程の脅威を感じました。また、原爆が起きた後の状況が描かれている、兒玉さんと高校生の室星理歩さんが協力して描き上げた「プールサイドの悲劇」では、兒玉さんがその時にどのような光景を目の当たりにしたのかが私たちにしっかり伝わる絵でした。多くの生徒が水を求めてプールに浮かんでいる様子、水道管から吹き出す水に群がって争う人達の様子が如実に表現されていて、原爆の

悲惨さを強く思い知らされました。命と共に希望や幸福も奪われる苦境な状況だったと思います。光雄さんもたくさんのクラスメイトや親友を亡くしました。今も深い傷が残っています。何の罪もない人達がつらい思いをしたり、死ななければならなかったりすることに、私はとてもひどく、残酷なことだと思いました。私は一昨年、病気で祖父を亡くしました。たくさんの祖父との楽しい思い出が蘇ってきて、もう話すことはできないのかと落ち込んでいました。今でも悲しいです。病気は人の意志ではどうにもすることができません。しかし、戦争は自分の国のことだけを考え、自分達の意志で行って相手国に甚大な被害をもたらします。多くの命はもちろんのこと、希望や幸福までもを奪いとってしまいます。人がそもそも起こさなければ始まることのない負の歴史は、絶対にこの先の未来においても二度とやってはならないと思います。

実際に体験したことのない人が被爆者から話を聞き、絵で表現することは容易なことではなかったと思います。しかし、地道な努力を重ね、体験者と未体験者が協力して描き上げた絵は、私たちに恐ろしさを理解してもらうとともに次世代に伝えていくという大事な役割を果たすことができています。

現代は、高齢化が進み、体験したことを私たちに伝えることができる人が年々減少しています。伝えることのできる人が減少したら、原爆での出来事を受け継いでいくことが困難になります。今回は「絵」で実際に起こった恐ろしい状況を表現し、次世代に伝えていました。私はもっと多くの人の目にふれて、知ってもらう方法はないかと考えました。例えば、八月六日に全国一斉で、実際に原爆を体験した人のお話をもとに作ったドラマを放送することです。多くの人が、お話では伝わりにくい内容や原爆の恐ろしさを知り、戦争に対する理解を深めることができるようにしてほしいです。

私はこの文章を書くにあたって、原爆を実際に体験していない私たちと次世代の人々が原爆の恐ろしさを知る必要があると強く感じました。未体験者が原爆についてのことを知れば、核兵器や戦争の恐ろしさを理解し、このような誰もが苦しみ、生きていくことが困難な世の中にはならないと思います。そして、命の大切さや平和の尊さを忘れずに尊重し続けることができると思います。

原爆の恐ろしさ、体験した人達の思いを知ることができた私は、原爆のことについて知らない人やこれからの未来を築き上げていく次世代に伝え続けていきます。今のように平和で希望が満ちている世の中であり続けてほしいと願っています。